

菊池短歌会

9月詠草

鳥啼けば余白の様なこの里の樹間に秋の風が動けり
巡りくる六十年目八月忌狂ふ現世浮雲仰ぐ
山下 菊代

万句の里俳句会

9月句会

六十路まで可も不可もなく線香花火
夕風に雲を流して月を待つ
東 鈴子

肥後狂句桜会

9月例会

金婚式感激も無ア歳になり
ひっかけて無口が舌のよう回る
荒木 玄海

泗水短歌会

9月詠草

金婚式 戦後のイバラくぐり抜け
右も左も座禅組らざる浮きばかり
光堀 善教

せせらぎ俳句会

9月例会

十六夜の雨戸一枚残しけり
この湿り逃さずまじと大根播く
五丁 義昭

七城短歌会

9月詠草

つかませもん 使い古しば世話さした
どうせなら 東大受けちつっこきゅう
左 党

旭志文芸俳句会

9月詠草

駆け馬の如くに過ぎし月日かも彼岸花咲けば彼岸
ま近し
森 道子

肥後狂句水笑会

9月例会

稲穂風総身に浴びて朝散歩
峡の風簾飛ばせて山女宿
内村 鈴子

七城短歌会

9月詠草

台風が近づくらしく釘づけとなりてテレビの予報
見ており
池田カツ子